
報告書

「2015年度 混合研究法国際シンポジウム @青学」報告書

本稿は、2015年9月17日に国際政治経済学部国際研究センター主催で開催された、Mixed Methods Research International Symposium @Aogaku（「混合研究法国際シンポジウム@青学」）の講演記録をまとめた報告書である¹⁾。4名の登壇者は、いずれも混合研究法の第一人者として世界的に著名な方々である。収容人数の関係から残念ながらシンポジウムの事前登録を早々に打ち切る形となったが、登録者数は200名を優に超えた。当日は悪天候にも関わらず、最終的に150名程の方々が日本全国より集まってくださった。

今回のシンポジウムで取り上げた混合研究法（mixed methods research または MMR）とは、1980年後半から1990年代に急速にその発展を遂げた「第3の研究アプローチ」であり、数量データを用いる量的研究アプローチとテキストやイメージなどのデータを用いる質的研究アプローチの両方を単一の研究プロジェクトの中で意図的に使用し、その結果を統合するものである。混合研究法の誕生は、1980年代を中心に社会科学の領域において展開したパラダイム論争（量的研究を主軸とするポスト実証主義と、質的研究を支える構成主義をはじめとするその他の世界観の間の対立）の結果である。質と量のそれぞれのコミュニティに属する研究者たちが、人間科学の探究においてどちらがより優れたアプローチであるかという闘いを激しく展開したのがこのパラダイム論争であった。そのような中、この闘いを不毛と感じた研究者たちが、2つの研究アプローチを補完的に使用することにより、単一のアプローチでは得ることのできないより包括的な知が得られると主張し始めたのが、混合研究法発展の始まりである。質的研究と量的研究のハイブリッドである混合研究法がもたらすシナジー効果の追求は、この新たな

1) 本シンポジウムの開催は、国際政治経済学部、国際研究センター、大学広報課の関係者各位ならびに院修生・院生・学部生など、多くの方々のご協力により可能となった。改めて御礼を申し上げたい。

第3の研究アプローチのもっとも重視される核といえる。

今回の国際研究センター主催シンポジウムは、この数日後の2015年9月19日・20日に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催された国際混合研究法学会アジア地域会議／日本混合研究法学会第1回年次大会の基調講演者を招いて行われたものである。以下に4名の登壇者の略歴を示す。

John Creswell (ジョン・クレスウェル)

米国ミシガン大学混合研究法研究所共同所長。教育心理学(Ph.D.)。混合研究法コミュニティを牽引するリーダー的存在であり、関連論文・書籍の数では右に出る者はいない。国際混合研究法学会初代会長(2014～2015)。

Pat Bazeley (パット・ベイズリー)

豪州ニュー・サウス・ウェールズ大学プライマリ・ケア医療と公正センター(Centre for Primary Health Care and Equity)特任准教授。国内外の大学や政府機関、民間組織で、大学教員、大学院生、研究者を対象に研修および相談サービスを提供するコンサルタント。コミュニティ心理学(Ph.D.)。ソフトウェアを用いた質的研究分析の第一人者として世界的に著名な研究者でもある。国際混合研究法学会第2代会長(2015～2016)。

R. Burke Johnson (パーク・ジョンソン)

米国南アラバマ大学教育学部教授。研究方法論が専門。教育評価学(Ph.D.)。その他にも、心理学、社会学ならびに行政学の修士号を持つ。混合研究法コミュニティでは哲学的存在であり、研究方法論を支える世界観に関する著作を多数持つ。国際混合研究法学会現事務局長。

Michael Fetter's (マイク・フェターズ)

米国ミシガン大学医学部日本家庭健康プログラム創設主任・同大学混合研究法研究所共同所長。医師であるとともに、公衆衛生学・文化人類学のバックグラウンドももつ(MD, MPH)。2016年現在、国際混合研究法学会の機関誌である *Journal of Mixed Methods Research* の共同編集長を務める。混合研究法に関する論文多数。母語である英語の他、ドイツ語、日本語、中国語も流暢に操り、日本各地において、医療・看護研究者を対象に、日本語による混合研究法のセミナーを実施している。

本報告書は3部からなる。第1部は上記4名の登壇者それぞれによる基調講演となっている。第2部のパネルディスカッションでは、基調講演者4名が、イベント参加登録者から事前に収集した混合研究法に関する質問に答える形を取っている。講演やパネルディスカッションの言語はいずれも、音源をそのまま活かした形になっている。したがって、基調講演についてはマイク・フェターズ氏を除く3名の基調講演者が英語、マイク・フェターズ氏の講演のみ日本語で報告されている。また、司会およびパネルディスカッションの質疑応答の際に使用された日本語は通訳の音源を元にすべて英語で報告されている²⁾。第3部は、今回のシンポジウムの企画を担当し、本報告書をまとめた抱井が国際混合研究法学会アジア地域会議/日本混合研究法学会第1回年次大会において行った基調講演（英語）となっている³⁾。

21世紀の研究アプローチともいえる混合研究法に関する考えを、コミュニティを牽引する4名のエキスパートの方々から今回このタイミングで直接伺うことができたことは、大変幸運なことであった。特にパネルディスカッションでは、パラダイム論争の再燃かと思われるような大変興味深い議論もあった。本シンポジウムの記録は、日々成長しつつある日本の混合研究法コミュニティにとって歴史に残る意義深いものであるといえる。また、本イベントは、青山学院大学にとっても、日本において混合研究法発展の歴史が刻まれる場を提供したという意味において、大きな貢献となったといえよう。本報告書の読者に、シンポジウムの臨場感が伝われば幸甚である。

国際政治経済学部国際コミュニケーション学科・教授
抱井尚子

第1部：基調講演 Part I: Keynote Talks

Dr. Hisako Kakai

Ladies and gentleman, it's 1:30. We would like to start the symposium. First, I

-
- 2) 同時通訳は、新崎隆子氏（本学国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程修了）と石黒弓美子氏にご担当いただいた。お二人の質の高い通訳に改めて感謝申し上げます。
- 3) 第1部の4名による基調講演のより詳細な内容と第3部の抱井による基調講演は、『混合研究法への誘い－質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』（日本混合研究法学会監修、抱井尚子・成田慶一編、遠見書房、2016年9月）に日本語で掲載されている。